

一九四〇年一月二日、国語協会は、「標準名づけ文字五百字」[図]を発表した。人名や地名に対する漢字制限のきっかけとして、東京高等学校講師の宮田幸一（一九〇四〜八九）の主導により、子供の名づけに使う漢字を五〇〇字に制限する、という提案をおこなったのである。国語改革をその目標に掲げる国語協会は、この後、一般社会における漢字制限を推し進める予定だったが、しかし、大東亜戦争の戦局はそれを許さず、子供の名づけに対する漢字制限は、戦中には、ほとんど実行されなかった。結局それは、戦後に奇妙な形で実現することになる。

一九四六年二月一日、司法省の戸籍委員会に、司法省民事局の青木義人（一九二二〜九七）は、戸籍法の改正案を提出した。この改正案は、それまで家を単位としていた戸籍を、夫婦を単位とする戸籍に変えるものだったが、同時に、子供の名づけに使う文字を、当用漢字・カタカナ・ひらがなに制限する、という案が含まれていた。国語審議会からの指示で、子供の名づけに使える漢字を、当用漢字

一八五〇字のみにしようとする改正案であった。青木は、のちにこう回想している（『戸籍』一九八二年九月号）。

この案を持ってこられたときには、ほくも相当消極的だったんです。住所とか人の姓など従来のものはそのままにしておいて、将来の子供の名ばかり問題にするのは、全然つり合いがとれんじゃないかと。読みにくくて困るのは、むしろ市町村や字の名前と人の姓なのに何で子供の名前だけ目のかたきにするんだと言って。（笑）それに当用漢字だけでは窮屈過ぎやせんかとかなりやり合ったわけだけど、国語審議会はなかなか強硬なんですね。

GHQや国会を通過した改正戸籍法は、一九四八年一月一日に施行され、子供の名づけは当用漢字・カタカナ・ひらがなに制限された。子供の名に対する漢字制限は、こうして始まったのだが、あまりに急に始まったために、日本

標準名づけ文字五百字一覧表

（数字はローマ数字を示す）

愛 ⁵³	伊 ⁵³	高 ⁵³	育 ⁵³	一 ⁵³	逸 ⁵³
宇 ⁵⁴	運 ⁵⁴	永 ⁵⁴	映 ⁵⁴	英 ⁵⁴	
衛 ⁵⁵	益 ⁵⁵	悦 ⁵⁵	延 ⁵⁵	園 ⁵⁵	頤 ⁵⁵
央 ⁵⁵	櫻 ⁵⁵	奥 ⁵⁵	乙 ⁵⁵	香 ⁵⁵	温 ⁵⁵
加 ⁵⁶	佳 ⁵⁶	花 ⁵⁶	夏 ⁵⁶	家 ⁵⁶	華 ⁵⁶
雅 ⁵⁷	介 ⁵⁷	海 ⁵⁷	外 ⁵⁷	交 ⁵⁷	角 ⁵⁷
鶴 ⁵⁸	學 ⁵⁸	完 ⁵⁸	勤 ⁵⁸	幹 ⁵⁸	寛 ⁵⁸
丸 ⁵⁹	岩 ⁵⁹	廣 ⁵⁹	己 ⁵⁹	李 ⁵⁹	紀 ⁵⁹
規 ⁶⁰	喜 ⁶⁰	菊 ⁶⁰	貴 ⁶⁰	毅 ⁶⁰	輝 ⁶⁰
義 ⁶¹	儀 ⁶¹	菊 ⁶¹	均 ⁶¹	欣 ⁶¹	近 ⁶¹
錦 ⁶²	教 ⁶²	郷 ⁶²	玉 ⁶²	均 ⁶²	欣 ⁶²
錦 ⁶³	謙 ⁶³	銀 ⁶³	玉 ⁶³	均 ⁶³	欣 ⁶³
計 ⁶⁴	桂 ⁶⁴	啓 ⁶⁴	啓 ⁶⁴	啓 ⁶⁴	惠 ⁶⁴
景 ⁶⁵					

敬 ⁶⁵	經 ⁶⁵	慶 ⁶⁵	繼 ⁶⁵	潔 ⁶⁵	研 ⁶⁵	建 ⁶⁵	兼 ⁶⁵	健 ⁶⁵
穎 ⁶⁶	滄 ⁶⁶	源 ⁶⁶	嚴 ⁶⁶	公 ⁶⁶	功 ⁶⁶	弘 ⁶⁶	甲 ⁶⁶	瓦 ⁶⁶
彦 ⁶⁷	護 ⁶⁷	公 ⁶⁷	功 ⁶⁷	弘 ⁶⁷	甲 ⁶⁷	瓦 ⁶⁷	元 ⁶⁷	
江 ⁶⁸	行 ⁶⁸	亨 ⁶⁸	孝 ⁶⁸	宏 ⁶⁸	幸 ⁶⁸	厚 ⁶⁸	恆 ⁶⁸	
江 ⁶⁹	行 ⁶⁹	亨 ⁶⁹	孝 ⁶⁹	宏 ⁶⁹	幸 ⁶⁹	厚 ⁶⁹	恆 ⁶⁹	
江 ⁷⁰	行 ⁷⁰	亨 ⁷⁰	孝 ⁷⁰	宏 ⁷⁰	幸 ⁷⁰	厚 ⁷⁰	恆 ⁷⁰	
江 ⁷¹	行 ⁷¹	亨 ⁷¹	孝 ⁷¹	宏 ⁷¹	幸 ⁷¹	厚 ⁷¹	恆 ⁷¹	
江 ⁷²	行 ⁷²	亨 ⁷²	孝 ⁷²	宏 ⁷²	幸 ⁷²	厚 ⁷²	恆 ⁷²	
江 ⁷³	行 ⁷³	亨 ⁷³	孝 ⁷³	宏 ⁷³	幸 ⁷³	厚 ⁷³	恆 ⁷³	
江 ⁷⁴	行 ⁷⁴	亨 ⁷⁴	孝 ⁷⁴	宏 ⁷⁴	幸 ⁷⁴	厚 ⁷⁴	恆 ⁷⁴	
江 ⁷⁵	行 ⁷⁵	亨 ⁷⁵	孝 ⁷⁵	宏 ⁷⁵	幸 ⁷⁵	厚 ⁷⁵	恆 ⁷⁵	
江 ⁷⁶	行 ⁷⁶	亨 ⁷⁶	孝 ⁷⁶	宏 ⁷⁶	幸 ⁷⁶	厚 ⁷⁶	恆 ⁷⁶	
江 ⁷⁷	行 ⁷⁷	亨 ⁷⁷	孝 ⁷⁷	宏 ⁷⁷	幸 ⁷⁷	厚 ⁷⁷	恆 ⁷⁷	
江 ⁷⁸	行 ⁷⁸	亨 ⁷⁸	孝 ⁷⁸	宏 ⁷⁸	幸 ⁷⁸	厚 ⁷⁸	恆 ⁷⁸	
江 ⁷⁹	行 ⁷⁹	亨 ⁷⁹	孝 ⁷⁹	宏 ⁷⁹	幸 ⁷⁹	厚 ⁷⁹	恆 ⁷⁹	
江 ⁸⁰	行 ⁸⁰	亨 ⁸⁰	孝 ⁸⁰	宏 ⁸⁰	幸 ⁸⁰	厚 ⁸⁰	恆 ⁸⁰	

常 ⁸¹	讓 ⁸¹	臣 ⁸¹	仲 ⁸¹	辰 ⁸¹	信 ⁸¹	津 ⁸¹		
須 ⁸²	穂 ⁸²	瑞 ⁸²	敷 ⁸²	新 ⁸²	親 ⁸²	人 ⁸²	世 ⁸²	仁 ⁸²
政 ⁸³	星 ⁸³	清 ⁸³	晴 ⁸³	盛 ⁸³	勢 ⁸³	靖 ⁸³	靖 ⁸³	靖 ⁸³
政 ⁸⁴	星 ⁸⁴	清 ⁸⁴	晴 ⁸⁴	盛 ⁸⁴	勢 ⁸⁴	靖 ⁸⁴	靖 ⁸⁴	靖 ⁸⁴
政 ⁸⁵	星 ⁸⁵	清 ⁸⁵	晴 ⁸⁵	盛 ⁸⁵	勢 ⁸⁵	靖 ⁸⁵	靖 ⁸⁵	靖 ⁸⁵
政 ⁸⁶	星 ⁸⁶	清 ⁸⁶	晴 ⁸⁶	盛 ⁸⁶	勢 ⁸⁶	靖 ⁸⁶	靖 ⁸⁶	靖 ⁸⁶
政 ⁸⁷	星 ⁸⁷	清 ⁸⁷	晴 ⁸⁷	盛 ⁸⁷	勢 ⁸⁷	靖 ⁸⁷	靖 ⁸⁷	靖 ⁸⁷
政 ⁸⁸	星 ⁸⁸	清 ⁸⁸	晴 ⁸⁸	盛 ⁸⁸	勢 ⁸⁸	靖 ⁸⁸	靖 ⁸⁸	靖 ⁸⁸
政 ⁸⁹	星 ⁸⁹	清 ⁸⁹	晴 ⁸⁹	盛 ⁸⁹	勢 ⁸⁹	靖 ⁸⁹	靖 ⁸⁹	靖 ⁸⁹
政 ⁹⁰	星 ⁹⁰	清 ⁹⁰	晴 ⁹⁰	盛 ⁹⁰	勢 ⁹⁰	靖 ⁹⁰	靖 ⁹⁰	靖 ⁹⁰
政 ⁹¹	星 ⁹¹	清 ⁹¹	晴 ⁹¹	盛 ⁹¹	勢 ⁹¹	靖 ⁹¹	靖 ⁹¹	靖 ⁹¹
政 ⁹²	星 ⁹²	清 ⁹²	晴 ⁹²	盛 ⁹²	勢 ⁹²	靖 ⁹²	靖 ⁹²	靖 ⁹²
政 ⁹³	星 ⁹³	清 ⁹³	晴 ⁹³	盛 ⁹³	勢 ⁹³	靖 ⁹³	靖 ⁹³	靖 ⁹³
政 ⁹⁴	星 ⁹⁴	清 ⁹⁴	晴 ⁹⁴	盛 ⁹⁴	勢 ⁹⁴	靖 ⁹⁴	靖 ⁹⁴	靖 ⁹⁴
政 ⁹⁵	星 ⁹⁵	清 ⁹⁵	晴 ⁹⁵	盛 ⁹⁵	勢 ⁹⁵	靖 ⁹⁵	靖 ⁹⁵	靖 ⁹⁵

能 ⁹⁵	波 ⁹⁵	梅 ⁹⁵	博 ⁹⁵	八 ⁹⁵	半 ⁹⁵	伴 ⁹⁵		
滄 ⁹⁶	源 ⁹⁶	嚴 ⁹⁶	公 ⁹⁶	功 ⁹⁶	弘 ⁹⁶	甲 ⁹⁶	瓦 ⁹⁶	
滄 ⁹⁷	源 ⁹⁷	嚴 ⁹⁷	公 ⁹⁷	功 ⁹⁷	弘 ⁹⁷	甲 ⁹⁷	瓦 ⁹⁷	
滄 ⁹⁸	源 ⁹⁸	嚴 ⁹⁸	公 ⁹⁸	功 ⁹⁸	弘 ⁹⁸	甲 ⁹⁸	瓦 ⁹⁸	
滄 ⁹⁹	源 ⁹⁹	嚴 ⁹⁹	公 ⁹⁹	功 ⁹⁹	弘 ⁹⁹	甲 ⁹⁹	瓦 ⁹⁹	
滄 ¹⁰⁰	源 ¹⁰⁰	嚴 ¹⁰⁰	公 ¹⁰⁰	功 ¹⁰⁰	弘 ¹⁰⁰	甲 ¹⁰⁰	瓦 ¹⁰⁰	
滄 ¹⁰¹	源 ¹⁰¹	嚴 ¹⁰¹	公 ¹⁰¹	功 ¹⁰¹	弘 ¹⁰¹	甲 ¹⁰¹	瓦 ¹⁰¹	
滄 ¹⁰²	源 ¹⁰²	嚴 ¹⁰²	公 ¹⁰²	功 ¹⁰²	弘 ¹⁰²	甲 ¹⁰²	瓦 ¹⁰²	
滄 ¹⁰³	源 ¹⁰³	嚴 ¹⁰³	公 ¹⁰³	功 ¹⁰³	弘 ¹⁰³	甲 ¹⁰³	瓦 ¹⁰³	
滄 ¹⁰⁴	源 ¹⁰⁴	嚴 ¹⁰⁴	公 ¹⁰⁴	功 ¹⁰⁴	弘 ¹⁰⁴	甲 ¹⁰⁴	瓦 ¹⁰⁴	
滄 ¹⁰⁵	源 ¹⁰⁵	嚴 ¹⁰⁵	公 ¹⁰⁵	功 ¹⁰⁵	弘 ¹⁰⁵	甲 ¹⁰⁵	瓦 ¹⁰⁵	
滄 ¹⁰⁶	源 ¹⁰⁶	嚴 ¹⁰⁶	公 ¹⁰⁶	功 ¹⁰⁶	弘 ¹⁰⁶	甲 ¹⁰⁶	瓦 ¹⁰⁶	
滄 ¹⁰⁷	源 ¹⁰⁷	嚴 ¹⁰⁷	公 ¹⁰⁷	功 ¹⁰⁷	弘 ¹⁰⁷	甲 ¹⁰⁷	瓦 ¹⁰⁷	
滄 ¹⁰⁸	源 ¹⁰⁸	嚴 ¹⁰⁸	公 ¹⁰⁸	功 ¹⁰⁸	弘 ¹⁰⁸	甲 ¹⁰⁸	瓦 ¹⁰⁸	

図「標準名づけ文字五百字一覧表」『標準名づけ読本』（婦女界社、1940年12月15日）より

中で混乱が起こった。当用漢字一八五〇字以外の漢字を名づけたために、子供の出生届を受理してもらえない父母や祖父母が、戸籍係の胸ぐらにつかみかかる、というような事件が多発した。混乱は国会にまで及び、戸籍法の再改正まで議論された。国語審議会は、『標準名づけ読本』を基に「弘」や「彦」など九二字を選定し、一九五一年五月二十五日、人名用漢字として内閣告示することで、事態の鎮静化を図った。

しかし、漢字制限に対する人々の不満はくすぐり続け、やがて爆発することになる。爆発のきっかけとなった一人が、一九七一年六月に歌手デビューした南沙織（内間明美、一九五四〜）だった。その様子を、芸能評論家の鬼沢敬一（一九三二〜）は、こう記している（『読売新聞』一九七六年三月二八日付朝刊）。

「サオリスト」は多い。狂ってるを自認するフォークの泉谷しげるは、まな娘に「沙織」と名を付けた。作家の大岡昇平さんも「右へならえ」。テレビを見ていて、顔のアップが少ないと「ディレクターがなっとらん」。

目次

表紙・裏表紙の漢字 002

特集

漢字の過去・現在・未来

対談 漢字はおもしろい 阿辻哲次 × 阿刀田高 004

白川静の世界——文字学と方法 石川九楊 024

日本古代の漢字事情 東野治之 030

東アジアの漢文訓読 金文京 038

漢字節減論をめぐる 清水康行 046

人名と漢字 安岡孝一 054

日本における漢字に対する加工とその背景 笹原宏之 058

雑誌コーパスに見る近代漢語 田中牧郎 066

日中漢語の交流と受容 荒川清秀 073

新聞における漢字とかな文字 土屋礼子 080

誤字ではない誤字の心理学 横山詔一 087

漢語「行人」——詩から小説へ 野網摩利子 091

三種の漢字の現れ方——「お買い物」の現場・デパートから見える風景 田中ゆかり 096

漢字を習得すること、教えることの難しさ——体系化をめざして ガリーナ・ヴォロビヨワ 102

中国における漢字使用の現状 朱京偉 107

韓国の漢字事情 呉美寧 110

台湾の現在の漢字事情 林立萍 113

展示・コレクション紹介

地球環境問題を暮らしの中へ——総合地球環境学研究所オープンハウス 熊澤輝一 116

連載

日本の道

第1回 古代の道 金田章裕 123

リレー論考 自然と人間の関係を考える

平家はなぜ滅んだのか——気候変動という視点 中塚武 132

私の研究と出会い

カザフ草原の暮らしから展望するイスラーム動態 藤本透子 142

執筆者一覧 148

HUMAN

ヒューマン

vol.07 2014 December

知の森へのいざない

2014年12月10日 初版第1刷発行

監修 人間文化研究機構

発行者 西田裕一

発行所 株式会社平凡社
〒101-0051
東京都千代田区神田神保町 3-29
電話 03-3230-6593 (編集) 03-3230-6572 (営業)
振替 00180-0-29639
<http://www.heibonsha.co.jp/>

ブックデザイン okamoto tsuyoshi+ (岡本健+・遠藤勇人)

印刷 株式会社東京印書館

製本 大口製本印刷株式会社

©Heibonsha Ltd. 2014 Printed in Japan

NDC 分類番号 811.2 A5判 (21.0cm) 総ページ 152

ISBN 978-4-582-21237-2 C0081

落丁・乱丁本のお取り替えは小社読者サービス係まで直接お送りください (送料小社負担)